

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 26 年 6 月 12 日現在

機関番号：34504

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2009～2013

課題番号：21520554

研究課題名(和文)第二言語ライティングに対する日本語学習者ビリーフ調査、およびライティング教材開発

研究課題名(英文)Belief study of learners of Japanese language on second language writing, and the development of learning materials for writing

研究代表者

長谷川 哲子 (HASEGAWA, NORIKO)

関西学院大学・経済学部・准教授

研究者番号：20368153

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 2,600,000円、(間接経費) 780,000円

研究成果の概要(和文)：今回の研究課題においては、日本語学習者が日本語ライティングにおいてどのようなビリーフを持つか、またそのビリーフの特徴と学習者の作文プロダクトの間に何らの関連が見られるかどうかを主な研究目的とした。これまで日本語教育におけるビリーフ研究では、教師ビリーフや学習者ビリーフを扱う研究が多かった。そのため、まずライティングに特化したビリーフ調査の項目の策定を目指し、関連文献の渉猟、またそれにもとづいた基礎的な調査を行った。研究期間途中で、研究代表者の事情により研究をいったん中断したため、本格的なビリーフ調査の実施、ならびに作文プロダクトに関する調査は今後の課題となった。

研究成果の概要(英文)：In this research theme, our main purpose was the followings; 1)to examine the factors of the belief of the learners of Japanese on writing Japanese, 2)to examine whether there is any correlation between the evaluation of the composition products of the learner and the factors of their beliefs. In the previous studies on learners' beliefs in the area of education of Japanese language education, most of the studies examined the general belief of the learners or the teachers. Therefore, the priority in this research was to range extensively over the literature on beliefs, and to conduct a pilot study in order to make an effective and efficient set of questions of belief inquiry to examine the belief on writing of the learners of Japanese language. Because of the interruption in the period of this research, a conduct of the full-scale belief study and an investigation about the composition product of the learners of Japanese are further tasks in this research.

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学・日本語教育

キーワード：ビリーフ 日本語学習者 作文評価

1. 研究開始当初の背景

科研費基盤研究(C)「誤用とその問題点の分析に基づいた日本語アカデミックライティング教材の開発」(平成 18-19 年度、研究代表者 長谷川哲子)においては、日本語学習者の意見文に対する大学教員の評価を調査し、文法や表現面の誤用よりも、文章構成の良し悪しが作文評価を決定付けることを実証的に明らかにした。この結果から、特に意見文においては、主張とその論拠の組み合わせに着目した教材案を作成した。このように、教員側からの評価、および、指導については、一定の成果が得られている。その一方で、近年、日本語教育、特に作文指導においては、ピア・レスポンス活動のように、日本語学習者相互の評価や批評を重視する作文プロセスや教材も導入されてきた。しかし、そもそも、ピア活動の当事者である日本語学習者は、日本語学習者による作文を相互にどのように評価するのか。この観点からの詳細な研究は、管見の限りまだない。また、日本語学習者がどのようなピリフに基づいて日本語ライティングを行うのか、という点にも十全な研究の余地が残されている。

そこで、日本語学習者の作文評価および作文執筆におけるピリフを実証的に解明することは、今後の作文指導において、日本語学習者が教員のみならず、自律的な日本語ライティング活動を進めるための、学習者の視点に基づく指導案および教材開発に資するところがあると考えた。

2. 研究の目的

本研究課題に先立ち、日本語非母語話者の作文に対して、日本語学習者である留学生がどのような評価を行うか、という点について予備的な調査を行った。また、学習者の評価が大学教員による評価とどのように異なるか、比較検討した。その結果、評価の高い作文、および、評価の低い作文について、日本語学習者の中には、大学教員が着目しなかった、もしくは評価に値しない、と見ている項目を、高く評価しているものが見られた。作文評価をめぐって、日本語学習者と大学教員の認識のずれが存在したままでは、教員から高い評価を得られるライティングや、また学習者への効果的な作文指導は望めない。そこで、本研究では、アカデミック・ライティング能力を要求される学部留学生を対象として、日本語ライティングに関するピリフ調査を行う。そして、日本語学習者はどんな作文を良い/良くないと判断するか、という作文評価・作文執筆のピリフ、さらに学習者の個人的要因(母語、日本語能力等)とピリフとの関連を質的調査、および量的調査によって明らかにする。また、アカデミック・ライティングをめぐる、大学教員と日本語学習者、それぞれの視点について比較検討を行

い、日本語アカデミック・ライティング教材の開発を行う。

3. 研究の方法

本研究は当初の計画として、以下の(1)~(3)に示す方法にもとづき、調査、分析、教材開発を実施する予定であった。

(1) 留学生を対象としたピリフ調査の項目設定、および調査実施

日本語学習者の作文評価および、作文執筆に関するピリフ調査(質的調査)

a.ライティングに関するピリフ調査項目を作成する。調査項目の設定においては、科研費基盤研究(C)「誤用とその問題点の分析に基づいた日本語アカデミックライティング教材の開発」(平成 18-19 年度、研究代表者 長谷川哲子)で大学教員から得られた、作文評価をめぐる自由記述コメントを活用する。また、BALLI(Horwitz1987)やSILL(Oxford 1990)を参照して、学習者ピリフや学習ストラテジーの調査項目としての妥当性を検討する。作文評価の評価対象には、『日本語学習者による日本語作文と、その母語訳との対訳データベース』オンライン版(国立国語研究所)を使用する。

b.予備的調査として、日本語教育に関わる研究者を対象としたパイロット調査を行い、調査結果については、PAC分析を援用してまとめる。その結果を利用し、研究代表者および研究分担者の勤務校の留学生(各 20 名、計 40 名)を対象に、質問紙を使用した質的なピリフ調査を実施する。

c.上記 b.の調査対象者に対して、回答内容に関するフォローアップ・インタビューを実施する。

日本語学習者の作文評価および、作文執筆に関するピリフ調査(量的調査)

a.上記の質的なピリフ調査の結果を分析し、調査項目の再検討を行う。研究協力者へも、調査項目の検討を依頼する。

b.検討結果を反映させた調査項目を作成し、研究協力者の勤務校に在籍の留学生(各 20 名、計 100 名)を対象とした量的なピリフ調査を実施する。調査実施の実務的作業は、研究協力者に依頼する。調査は質問紙によって行う。また、ライティング結果とピリフの関連を探るため、並行して、留学生による作文執筆調査も実施する。

(2) 上記(1)の調査結果の分析

質的・量的ピリフ調査結果を分析し、日本語学習者のライティングをめぐるピリフの概要を示す。

日本語学習者のライティングピリフ、

およびライティング結果と、学習者の個人的要因との関連を分析する。

(3) 上記(1)の調査結果に基づくライティング教材開発

日本語学習者のライティングに関するピリーフを反映させ、日本語アカデミック・ライティング教材案の提出および指導案の提言を行う。

4. 研究成果

本研究は、研究期間中に、研究代表者の事情により研究期間の中断を行ったため、当初の研究計画の遂行が大幅に遅れ、想定していた研究成果に到達することができなかった。その中で、以下に、文献調査の結果と、ピリーフ調査に関する基礎的調査の概要を述べる。

まず、文献調査として、日本語教育におけるピリーフ研究関連の先行研究を検討した。日本語教育の分野におけるピリーフ研究では、調査対象者として学習者ピリーフおよび教員ピリーフを扱うものがほとんどである。学習者ピリーフ、教員ピリーフともに、日本語学習や日本語指導、また特定の指導法やアプローチ、教室活動等の教育実践に関するピリーフを調査項目とするものが大半である。さらに、特定の国・地域や教育機関における日本語教育や日本語指導実践に関するピリーフ調査も散見される。その中で、ライティングに関するピリーフ研究を行っている研究者はわずかである。一連の文献調査を通じて、日本語教育におけるピリーフ研究の動向として、こうした傾向が研究期間開始当初から現在まで続いていることが分かった。研究課題に直結した先行研究は、日本国内では数が少ないが、ピリーフ研究そのものの概要や研究動向については、英語教育や英語学習についての文献が豊富に蓄積されているため、近隣の分野として常にフォローしていく必要がある。

次に、ピリーフ調査項目策定のために行った基礎的調査の概要および調査結果を以下に述べる。

(1) 調査の位置づけ

日本語学習者のうち、留学生にとってアカデミック・ライティングは不可欠のスキルであり、レポートや論文等のプロダクトは、教員や査読者等による評価を必ず受ける。このことを踏まえ、本研究課題に先立ち、日本語学習者の意見文に対する大学教員および日本語学習者の評価を調査した。この調査は、大学教員の作文評価調査に用いた作文から2つを選定し、この2つの作文を38人の学習者に評価させ、どちらの作文が高評価であると判断したか、およびその理由について自由記述形式で回答してもらったものである。その結果、教員と同様の評価を示した学生とそう

でない学生には着目点の差が見られた。具体的には、教員が低い評価を与えた方の作文を高く評価する学習者は、文体や列挙表現のような形式的で部分的な側面に対して肯定的にコメントしている。この側面については、教員は高い評価を与えてはいない。このことは、被評価者と評価者との間に、どのような作文がよい作文であるかという評価の観点に乖離が存することを示唆するものである。

そこで、この調査結果より明らかになった、学習者の評価と教員の評価との異なりを要因が学習者自身のライティングに対するピリーフにあるのではないかと推測し、今回の研究課題を設定し、基礎的調査を計画した。この調査はライティングに関するピリーフ調査項目策定に向けた基礎的資料を得ることが目的である。

(2) 調査内容と先行研究との関連

大学院レベルの研究留学生を対象とした専門日本語ライティング教育に関する研究として、村岡貴子らによる一連の研究がある。村岡は、「論文スキーマ」という概念を用い、この「論文スキーマ」形成における成功者・不成功者の間に文章評価の視点に差があることを紹介している。「内容・構成」「段落や文の接続における論理展開」「表現・文体」の3つの視点のうち、不成功者は「内容・構成」と「論理展開」についてはコメントができず、「表現」レベルにかなり偏っていたことを指摘している。これは、上述の研究代表者による調査結果と同様の傾向を示すものである。

次に、日本語学習者のライティングに関するピリーフ調査として、田中信之氏、石橋玲子氏による一連の研究が挙げられる。特に本研究課題と直接的に関連する先行研究には、石橋氏のピリーフ調査研究2件がある。石橋氏は国内の日本語予備教育の日本語学習者を対象とした調査から文章産出に関する言語活動項目を抽出し、調査項目を作成している。これらの調査は、JSL/JFL環境下にある日本語学習者のライティングに関するピリーフ研究における本格的な調査の嚆矢と位置づけられる。本研究は、こうした先行研究を承けて、ピリーフ調査項目の充実、ひいてはライティングに関するピリーフ調査研究を進展させる端緒とするものである。

(3) 調査の概要

日本語教育におけるピリーフ研究では、ライティング等特定のスキルに特化したピリーフ調査は、管見の限り、十全な段階には至っていない。そのため、本調査では、ライティングに関するピリーフ調査の項目策定に向けた基礎的資料を得ることを調査目的とした。調査対象は日本語または日本語教育に関連する分野を専攻とする大学院生(調査実施時(2012年度))20名とした。調査方法には、PAC分析の手法を一部援用した。自由連

想では、留学生が日本語で作文を書くとき重要だと思うこと、作文で高い評価を得るために注意すべき点、また、作文を評価する際に着目する点を連想刺激とし、連想間の類似度評定に基づくデンドログラムをもとに考察を行った。

(4)調査結果および考察

今回の調査では内容、構成、正確さ等、従来の作文指導において重視されてきた項目が得られた一方で、読み手への配慮、内容のオリジナリティ、ジャンルや文体への意識等、先行研究でのライティング関連のピリフ調査では含まれていなかった、以下のような項目が回答として挙げられた。

内容、テーマ、構成、伝達性（伝えたいことが伝わっているか）、オリジナリティー（独創性）（内容の）一貫性、説得性、当事者性（具体例や自分の経験を書いているか）、読み手への意識（共感を得られるかどうか）、論理性、インパクト（おもしろさ、魅力 etc.）、冗長さ、表記、語彙、正確さ、接続詞、体裁、文体、テキストタイプ（ジャンル）、修辭法、剽窃に関する意識（引用の仕方、コピー＆ペースト、etc.）
参考資料

石橋氏による分析では、文章産出に関して「主題の明確さの必要性」、「構成の重要性」、「読みとの関連の重視」などのピリフを日本語学習者は強く持っている結論づけている。これらはどれも「作文を正確に/適切に書くためのスキル」に関するものであると思われる。一般に、プロフィシエンシー研究では、文法的に誤りがない、適切な言語形式を用いて文章を構成できる能力を「正確さ (accuracy)」とみなす。この考えを援用すれば、石橋氏がピリフ調査によって明らかにしたことは、日本語学習者は文章産出に関して、文法的誤用をおかさないという文法的正確さに加えて、適切な文章構成を保った“広義”の「正確さ」が必要であるというピリフを持っていると考えることができよう。

今回の調査で得られた回答項目のうち「内容」に関わる項目としては、「オリジナリティー（独創性）」、「（内容の）一貫性」「説得性」「当事者性」「インパクト」が挙げられる。これらの項目のうち、「オリジナリティー（独創性）」、「当事者性」「インパクト」については、いわゆる意見文のレベルであれば、特にこれらの項目に秀でた内容でなくとも合格点に達するようなある程度の点数は獲得できる作文となるのではないだろうか。つまり、間違っただけではないが無難、おもしろみに欠ける、という印象の作文である。しかし、アカデミック・ライティングのレベルでは、上記の5点が特に重要なものとなる。意見文のレベルを超えて、読み手を引きつけたり、他とは異なる新しい説を理解されるように提示

したりするという視点は、読み手である評価者の視点に近づくものであると言えよう。書き手の立場にしか立っていない場合には、こうした視点を持ち合わせることはできないことが示唆される。

今回の調査において、「内容」に関わる項目として、「オリジナリティー（独創性）」（内容の）一貫性」「説得性」「当事者性」「インパクト」のような項目が得られたのは、調査対象である大学院生が、学生としてレポートや論文を執筆し、それを評価される立場であると同時に、研究者として学術論文を批判的に評価したり、また時にはチューターや日本語教師として書かれたものを読み、それを評価したりするという立場にもあることと無関係ではないだろう。

もう一点、「読み手への意識」も、新たに得られた項目として着目すべきものである。今回は「読み手への意識」として項目化した。具体的には「読み手を共感させることができるかどうか」「読み手を説得できるかどうか」「読み手への配慮がなされているか」「専門家ではない読者に理解できる内容になっているのか」という記述が得られている。これらの観点は、読み手を評価者と位置づけ、さらにその評価者/読み手の立場から自らのプロダクトをもう一度とらえ直すという俯瞰的な視点を要求するものである。この観点がピリフとして保持されているかどうかは、まさに上述の「読み手の要求・欲求を満たす内容」を産出できるかどうかに関わると考えられる。

最後に、「剽窃に関する意識」も着目すべき点である。教員や評価者側にとっては至極自明のことであるが、アカデミック・ライティングの緒についたばかりの学習者にとっては、強調しすぎてもしすぎることはないものである。剽窃はいわばマナーに関するものであり、上手下手や読みやすさには直接的な影響を与えにくいと思われるが、評価に際してはきわめて重要である。特に、大学院留学生において、こうしたピリフがピリフとして保持されているかどうかは学府で研究に携わる一員として重視されるべきものであると考える。

以上、今回の調査で得られた項目について、特に先行研究では挙げられていなかった項目を中心に取り上げた。調査結果として抽出できた項目はいずれもアカデミック・ライティング能力の向上に向けて重要かつ欠かせないものばかりであり、日本語学習者のライティングに対するピリフ調査作成に資する結果が得られたものと考えられる。

以上が、本研究課題の中心的調査であるピリフ調査の項目策定の前段階として行った基礎的調査の概要である。今後の研究課題としては、

・日本語教員、専門教員に対するピリフ調査

- ・日本語学習者と教員のピリーフの異同
- ・ライティングに対するピリーフとプロダクトやプロダクト評価との関連
- ・日本語学習者の学習歴や母語とピリーフの関連

が挙げられる。研究期間当初に計画していた調査や研究活動を十分に実施することがかなわず、積み残された問題が多い。今後も継続的な調査が必要である。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕(計 1 件)

長谷川 哲子、堤 良一、意見文の分かりやすさを決めるのは何か? : 大学教員による作文評価を通じて、関西学院大学日本語教育センター紀要、査読無、第1巻、2012、7-18

〔学会発表〕(計 1 件)

長谷川哲子、堤良一、留学生のライティングに対するピリーフ調査項目策定に向けた調査について、2013 年度日本語教育学会第10回研究集会、2014/3/8、園田学園女子大学(兵庫県)

〔図書〕(計 0 件)

〔産業財産権〕

出願状況(計 0 件)

取得状況(計 0 件)

〔その他〕

なし

6. 研究組織

(1)研究代表者

長谷川 哲子(HASEGAWA, Noriko)
関西学院大学・経済学部・准教授
研究者番号：20368153

(2)研究分担者

堤 良一(Tsutsumi, Ryoichi)
岡山大学・社会文化科学研究科・准教授
研究者番号：80325068